
他分野からのコメント

教育分野から

浅見 奈緒子

高大連携授業として行われた「食・地球環境・地域環境・命の授業」教育実践は1年間を通じて行われた継続的な学びの経験として、生徒たちにより影響を与えたと考えられる。

そのポイントは、継続した学びと支援体制にあるといえる。継続性は非常に重要で、年間を通して、高校側と大学側の教員が連携して計画を編成している点がそれを実現可能にしている。また、導入と最終ゴールが明確に示されていることや、生徒らの興味に沿ってそれぞれが課題を見出し、自発的な行動、深い学び、研究発表というサイクルにすることで、生徒らの自主性を引き出す流れになっていることが功を奏しているのではないかと。

生徒の実態を把握し生徒が相談しやすい高校の教員と専門家である大学の教員、両方からのフォローアップ体制が整っていることが、可能にさせているといえる。近年では高大連携の企画はさまざまに行われており、例えば、大学教員らによる出張授業等は、生徒らの様々な琴線を刺激し、興味を喚起し、将来のキャリア選択といった教育の視点において非常に効果的である。しかし、短期的だったり、フォローアップが高校等の教員のみで行われることが多いため、継続的な深い学びを得られることが難しい。本授業を受けている生徒の特性を考えると、後者ではなく前者の方法を取り、生徒らの主体性や広い視野の獲得にある一定の時間をかけた方が効果的だといえる。

自身の身近なものごとを、普通の生活では実感することの難しい課題と結びつけ、自分事に落とし込み、教科横断的に考える。自然科学のテーマを中心に据えてはいるが、理科にとどまらず、社会科・家庭科以外にも教科に分類することができない視点、地球規模の考えを述べる方法など総合的に意見を述べる、その過程を通して、結果的に様々なことを意識するきっかけとなっている点も評価したい。

今後の課題としては、本授業を今後も継続して行い、その内容、効果、影響を評価し、その結論を共有していくことがあげられる。授業を担当した教員らから、本授業に関する教員間の共通認識や相互理解の重要性について指摘されているので、今後に期待したい。

福祉分野から

山口 道宏

1. 「マンホール」と模擬体験

昨年のことだ。2つの高校生グループの研究発表を聴き、その柔軟な発想に驚いた。

北海道のA高校チームは「過疎化」「町おこし」がテーマ。道路上の「マンホール」に着眼すると、全国からマニアを呼び込み活性化をという企画だ。これには地元自治体も関心を示した。一方の関西のB高校チームは「身近なバリアを考える」がテーマ。「体験」に勝るものはないと「車イス」を調達するや、学校から最寄りの主要駅まで、さらに駅構内の自走を試みた。「車イスの目線からは沢山の気づきがあった」が事後談だ。

2. 労働問題は人権問題

『15歳からの労働組合入門』という本がある。著者は「労働記者」で知られる毎日新聞の東海林智記者だ。近年は「ブラックバイト」に顕著だが、長時間労働や賃金不払い、パワハラ被害など、若い労働者の周辺でも労働法無視が蔓延している。厚労省調べでもアルバイト大学生の6割が労働条件をめぐるトラブルを経験しているという。ひとは「働く側の権利」を一体いつどこで誰から教わるのか!? その東海林は過労死についても。「---せめて、この子をその腕に抱かせてあげたかった。東海地方に住む過労死で夫を亡くした女性の涙が忘れられない。結婚5年目でようやく授かった女の子。娘のあどけない笑顔もぬくもりも知ることなく夫は逝った。奪われた私の時間の中には、家族とともに過ごす時間も含まれているのだ。」(毎日新聞 2017.11.22)。

いまや労働者が労働者として当たり前の権利行使すら危ういのか。労働問題は人権問題だ。これから社会へ歩む若者に、大人の側が何をどう伝えられるのか。

3. 身近な福祉課題を、高校生の眼で

アルバイト事情ばかりではない。現代社会における福祉課題はどれも根が深い。「いじめ」「ひきこもり」「虐待」も複雑且つ深刻さを。また家族の崩壊につながりやすい貧困では「リストラ」「雇止め」「非正規化」という雇用関係の不安定に要因が。また「奨学金地獄」「待機児童」「介護悲劇」「格差社会」「下流老人」もごく身近なことだ。この次には「町おこし」や「バリア体験」のように、これら「暮らしのいま」を、高校生の眼で、みたまを語り合うはどうか。

国際関係分野から

大嶋 英一

今回の特集では、環境をテーマに高大連携授業を担当した大学教員と高校の教員の双方から授業の狙いと授業の結果生じた高校生の変化や課題について極めて興味深い報告が提出された。本稿では国際分野を担当している立場から、今回の高大連携授業が国際分野の教育に与える示唆や課題等について簡単に印象を述べたい。

1. よく練られた授業計画と良好な結果

高校の先生方の観察や生徒の感想文から、今回の連携授業が大きな効果を上げていることが看取されるが、そのような結果を導いた大きな要因は、授業の最終目標とそれに至るまでの目標段階が明確に規定され、各段階で実際にどのような授業をやるのかについて周到に計画が練られたことにある。

2. 国際分野の教育との関係

今回の高大連携授業の内容は、国際関係とも密接に結びついている。というのは、パーム油の生産国と消費国は異なっており、生産国だけの努力でパーム油採取に伴う森林破壊や生物の殺害を防ぐのは困難だからである。生徒が今回の授業を通して、例えばパーム油の採取と森林保護・野生動物保護は両立するか、そのためにはどのような国際協力が可能かということにまで関心を広げることになれば、環境分野と国際分野の教育が相互乗り入れすることになり、生徒の視野は一層広がることが期待できる。

3. 課題

以上の通り今回の高大連携授業は大きな成功例と言えるが、このような授業が常に可能なわけではない。特に国際分野の教育では、体験学習と言っても生徒を海外に連れて行くのは費用・安全・言葉等ハードルが高く、すべての生徒が参加することはむずかしい。また、今回の授業を担当した教員も指摘しているとおり、体験型の学習だけで生徒が知らなくてはならない知識をすべて身につけることは困難だからである。

そのような限界はあるとしても、今回の高大連携授業が与える示唆は大きい。それは、モチベーションの低い学生であっても意欲を高めるひとつの方法を示しているからである。

スポーツ身体表現分野から

服部 由季夫

まずこのプログラムに関わり、実践し、生徒たちを導いた先生方に敬意を表します。

学校での保健体育では、健康の保持増進や体力の向上を目指すべき旨、教科の目標に示されている。そしてこれらを達成する為に、生活習慣、即ち運動や食事、休養の大切さが説かれる。

食事に関しては、現代の栄養学が中心となりがちであり、栄養素を主体として考える傾向がある。そうした視点からだと、体育の場面では3枚目のスライドに示されたことに留まってしまう。しかし、現実的には一つに事象には多くのこと纏わっており、即ち環境問題であったり、国際問題であったりである。言い換えると本来は一つの事象から多くのことを学び得るはずであり、現在の縦割り学問(?)ではそういった関連がややもすると見えにくくなっている。本プログラムにおいては、そうしたことを伝え得る可能性が内包されている。

食や土、森という視点で言うと、例えば現在遺伝子組み換えの食物の問題なども看過出来ないが、モンサント社のラウンドアップと遺伝子組み換え食品などがすぐに頭に浮かぶ。TPPが始まれば遺伝子組み換え食品も素通りとなり、私たちの健康もより脅かされかねない。土の問題でもベトナム戦争での枯れ葉剤も過去の問題ではない。まさに今、我々が直面している問題である。

食の問題の更に一つの事象に着目しても多くのことと関連して学びうるものが、本プログラムにより示唆されている。体育において健康を伝えることは短絡的な指導になること無く、関連する事項に言及されるべきである。

本来、人は自然の一部であり、星槎大学の人と自然との共生という表現も、不遜な一面がないとは言えない。即ち人が自然の一部であるにもかかわらず、人と自然があたかも対立するような表現となっているからである。地球環境が破綻することによって人類が平和になるとするならば現在のベクトルで進める方が良くであろう。しかし自然の一部としての人は所謂自然破壊が齎されることにより、自らも絶滅に近づくはずである。体育やスポーツは本来複合分野であり、その中で自分の分野を更に細かく限定してしまうことは、木を見て森を見ずという状態になりかねない。私自身が体育、健康教育に関わる教員として自分の専門領域に固執すること無く、横断的に関わって行きたいと考える。こうしたプログラムにも積極的に関わって行きたい。

星槎国際高校にはアクティブ・ラーニングによる全国一斉授業があり、そこに大学教員が指導する形で関わっている。高校と大学が連携する意味は、星槎大学の共生・共生教育を考える上でも意味がある。大学教員は共生と言いながら、各専門分野の枠組みでの研究・教育に陥りがちだからである。高大連携授業という形式により、各分野の専門的な研究成果を、高校生に分かる内容に噛み砕き、彼らに分かる教育方法で伝えることが可能となる。

今回の高大連携授業は、環境分野の大学教員による「命の授業」を土台にしている。大学教員は、命の大切さを伝えるために身近なお菓子(日常)を取り上げ、それを生き物の屠殺(非日常)へとつなげ、強い刺激で命の大切さのメッセージを送る。フィールドワークを通して、自分と生き物・自然との関係について五感を通して理解してもらい、五感で感じたことを体系的な知識として定着させようと試みる。高校生にも分かるようにという授業の取り組みは、大学教員から見ると、「専門知」を高校生の「生活知」につなげ、「日常」と「非日常」をつなげるという意味での共生教育であったのである。

生徒から見ると、お菓子と屠殺シーンとの関連という問いかけは、食べ物と自分との関係を問い直すものであり、フィールドワークは、あまり体験してこなかった自然と生き物(昆虫など)との関係をみずからに問いかけ、命を支える自然の循環機能について理解するものとなる。これらの知的な刺激と五感での体験を受けて、どうしても発表したい衝動を持った生徒たちは、グループ課題学習「学びからの発信～過去から未来への警告」で思う存分、葛藤を含めて考えたことを発表する。生徒たちも自分と命との共生、自分と(感じ取りにくかった)自然との共生、五感と知識との共生を学び合ったのである。

生徒の柔軟な発想での学び合いの展開プロセスは、素晴らしいの一言であるが、それは生徒の力だけでなく、生徒の実態を理解し、生徒の認識の展開をさまざまな工夫で支えている高校の先生方の、教え込まない学習支援やカリキュラム上の工夫に負うところが大きい。生徒は、先生が影で支えていることにあまり気づいていない。しかし本当の教育は先生が黒子に徹し、生徒たちが自主的に学んでいると実感できるような「しかけ」を創ることではないだろうか。大学教員と生徒たちとの共生・共生教育だけでなく、高校の先生と生徒たちとの共生・共生教育の視点を、この実践記録から読み取ることができる。

高大教員間の共生的な相互理解と連携、生徒における五感と知識の共生、生徒間の共生と協働学習のあり方など、課題がいくつかあるのは事実である。しかし今後に向けた課題が見つかるほどに充実した学びとその支援があったことを、私たちは汲み取ることから始めたい。他分野(教育・福祉・国際関係・スポーツ身体表現)の先生からのコメントも、教育の本質に学ぶという観点が共通している。本当に教えた人が教え、本当に学びたい人が学ぶという共生・共生教育の営みは、教育とは何かを問いかけてくれる。(編集委員)

